くことも稀ではない。それを説明するものは何なのか。行政機構が，なぜビューロクラシーへと変貌し，社会主義が，なぜ圧制へと，正義が，なぜ特権へと変わらなければならないのか。なぜコミュニズムはスターリンを生みだし，なぜ社会民主主義はギー・モレーを生みだしたのか。われわれが今日不平をいっている社会は，前世紀の人間にとってのユートピアそのものではないか。前世紀にくらべて，人は少しも自由になったようにはみえない。とすれば腐敗はどこから忍び込んできたのか。これらの問に答えうるただ一つのものこそ，もと，悪についての本源的な直観から生まれた tragique であるということになるだろう。

くりかえしていえば，tragique とは，固定したイデオロギーでもなければ，ドグマでもない。それはあるいは問題にたいする答えでさえなく，むしろ単に一つの態度，解答もなく，救いもないまま，苦悶の状況に置かれている人間の，それでもなお，いわば自己超出の意欲に導かれてあえて不可能に挑もうとする一つの態度なのだというべきかもしれない。それはもともとすぐれて西欧的なものであるが，その西欧においても，主体的な自己超出への意欲の喪失，精神の葛藤を失ったニヒリズムの瀰漫はかなり一般的であるようだ。敵が見えないのなら，なぜ自分自身を敵としないのか，と Domenach は問うのである。一つの貧しい時代，〈乏しき時代〉への告発の激しさに，われわれもまた胸をゆすぶられずにはいない。

Jean-Marie Domenach : *Le Retour du Tragique*, Edition du Seuil, 1967

T. S. Eliot ; *Poems Written in Early Youth*

虎 岩 正 純

T. S. Eliot の初期の詩，つまり *Prufrock and Other Observations*, 1917 に収められていない，それ以前の詩について，われわれはときおり噂をきいた。*Smith Academy Record* とか *The Harvard Advocate* という雑誌の名前を，伝説のように遠く耳にしたこともあった。しかし，誰もその全体を見たことはなかった。というのが不正確ならば，少なくとも私は見たことがなかった。ただラフォルグの詩に似ているという‘Humouresque’という詩のテキストを批評家の引用で読んだり，ボードレールや世紀末詩人たちが好みそうな‘Spleen’というタイトルをつけられた詩の存在を聞かされたりするときに，わずかに伝説が現実にひきもどされる体験をもったにすぎない。誤解であろうとなかろうと，私には *Prufrock* をひっさげて登場した Eliot 像しかなかった。なるほど D. Gallup の編んだ Bibliography をのぞくと，*Prufrock* 以前に一つの時間のあったことを知らされるし，その間に作られた作品の名前さえも知ることができる。しかし，私にはやはりそれは実感を伴わぬ伝説にすぎなかった。

衆知のように，Eliot は 1894 年に Smith Academy に入学する。それから 1906 年に Harvard に入り，1909年に B. A., 1910 年に M. A. の学位をとっている。この間に作られた詩を集めたのが，この *Poems Written in Early Youth*, 1967 である。もう少しくわしくいうと，1904 年の冬から 1910 年の

春にかけて，つまり 16 歳から 22 歳のあいだに作られた詩 14 篇が収められている。むろん，これがすべてということではない。現存していると思われる詩のすべてである，とエリオット未亡人 Valerie Eliot が Note に書いている。そして，それ以前から詩作を始めていたと Eliot からきいた話を伝えている。9 歳か 10 歳の頃に「毎週月曜日の朝がやってくるとまた学校へ行かねばならない悲しさについて一寸した韻文をいくつか」書いて母親に見せたという。それから 14 歳の頃には，「*Rubáiyát* 風の陰うつな四行詩」を書いたが，これは誰にも見せずに破棄してしまったという。いずれにしても，*Prufrock* 以前の現存する詩はすべてこの一冊に読むことができるようになったのである。

もっとも，Eliot の学生時代の詩を集める試みは幾度かされていて，1938 年，1948 年には *The Harvard Advocate* が Eliot の許可なしに再録しているし，1948 年にはやはり *Advocate* の編集者が無断で *The Undergraduate Poems of T. S. Eliot* というパンフレットを発行している。そして，私たちが手にしているこの詩集も，じつは，1950 年に John Hayward が Stockholm で私家版として，僅か 12 部限定で出したものの再版なのである。Valerie の Note によれば，Hayward の版は Eliot が目を通して，それまでに出された私家版の誤りを訂正したということである。作品の価値ということを別にして，これは Authorized Version なのである。そして，再版とはいえ，われわれの手に入るようになったという意味で，やはりこれは新しい書物といってよいだろう。

ただここで注意を喚起しておかねばならぬことは，Eliot 自身，これらの作品を自分の全詩集 *Collected Poems* から除外しているということである。したがって，詩自体の価値判断というよりは，やはり「発生期の詩人」の追求という読み方をすべきなのであろう。この点に関しては，すでにかなりのことが言いつくされてしまっているわけで，したがってここですることはテキストをふまえた再確認ということになるだろう。

われわれがさかのぼることのできる最初の作品は，'A Fable for Feasters' で，これは 1905 年 2 月，*Smith Academy Record*, VIII, 2 に掲載された。Eliot が 17 歳のときの作品である。いくらかの例外があるが，12 連からなる ottava rima のやや長い詩で，文字どおり，お話を含む fable である。Henry VIII 以前のイギリスで，堕落僧の宴会の席にしばしば現われる幽霊があって，クリスマスの夜の宴席にも修道院長のあらゆる工作にもかかわらず現われ，彼をつれてどこかへ姿を消してしまった，というのがお話である。このバイロン風の詩が，Eliot の出発点でないことは前述のとおりであるが (J. Hayward は印刷にふされた最初の作品と註をしている)，いくつかの問題点をわれわれに示してくれる。17 歳という年齢を考慮にいれても，詩によって物語を語りうると考えたこと，きわめてモラリスティックな内容であること，そして，それにもかかわらずユーモアに満ちていることである。第一の「物語」の問題は，詩の言葉がなにかを「意味する」と Eliot が考えていたことで，やがて象徴主義の洗礼を受けることになるのだが，やはり「意味」にすがりついていくその後の展開を考えるときわめて興味ぶかい。のちに，彼は「詩と音楽」というエッセイの中で，マラルメなどのフランス象徴詩人たちが音楽性にたよって，意味を捨ててしまったが，音楽と意味とを結びつける詩がありうると考えている，という内容の発言をしている。一人の詩人が誕生する環境と与件をすべて調べつくすことは困難なことであるが，Eliot の意味への傾斜はすでに 17 歳のときにあったのだと

いってよいだろう。このことは，ただちにモラリストの問題に結びついていく。モラリストであるから意味を志向するのか，あるいはその逆であるのかどちらともいえぬが，この二つの側面が Eliot のなかで分かちがたく結びついているのは確かである。この詩は *Prufrock* のなかの，現在の教会の堕落腐敗を歌った 'The Hippopotamus' につながっているように思われる。この意味への傾斜とモラリスティックなテンペラメントだけではおそらく三文詩人になったかもしれぬが，ユーモアがそれを救ったと思えるところがある。じっさい，この詩はお話が面白いというわけでもないし，悪が滅びるというモラルもつまらないが，モラリスティックでありながら，べったり対象にくっつかないで離れた態度で遊びをしているところがあって面白い。もっともそれが稚拙さからくるものなのか，意図したものか分かりかねるが。たとえば，幽霊を閉め出すために部屋を聖なる水 (holy water) で清めるところのおかしさ，

> He doused the room in which they were to dine,
> And watered everything except the wine.

あるいは宴会の料理を並べたてるのだが，そこにあるおとぼけぶり，

> The menus of that time I am afraid
> I don't know much about——as well's I'm able
> I'll go through the account: They made a raid
> On every bird and beast in Æsop's fable

これらが，いくらかでも読めるものにしている。そして，Eliot が一方で *Ash Wednesday* などの著者であり，一方であの *Old Possum's Book of Practical Cats* という楽しい書物の著者であったということをわれわれはしばしば忘れるのであるが，生真面目さとユーモアとの間でたえずゆれていたようである。

二番目の詩 'A Lyric' は，Smith Academy の英語の教師 Roger Conant Hatch が課した宿題にこたえて作られたもので，1905 年 1 月 24 日と記されている。Valerie Eliot は興味深い話を伝えている。この詩は Ben Jonson の模倣であるが，これを見た英語の教師は大いに感心して，誰か年上の人に手伝ってもらったのではないかとたずねたということである。Hatch 先生は 'A' の成績をつけて *Smith Academy Record*, VIII, 4 (April, 1905) に掲載した。ところで Eliot は，家のものに見せなかったが，後になって母親が見るところとなり，彼女が書いたものより良いと思うと意見を伝えた。Eliot は劇詩 *Savonalora* の著者である母親がどういうものを詩と考えているか分かっていたので，それ以上話すのをやめてしまった，ということである。

If Time and Space, as Sages say, で始まる 8 行 2 連のこの詩は，一瞬のうちに永遠を生きる蝶のように，恋人よ，花あるうちに花をつめと歌ったものである。Eliot が Valerie に語ったとおり，Ben Jonson の模倣だとすると，たとえば *Volpone; or the Fox* の中で Volpone が Celia を誘惑する Song を思いおこすのであるが，Ben Jonson にかぎらず，Marvel, Donne, E. Waller, R. Herrick 等々の詩人が歌った伝統的な表現方法といってよい。ただ，ここで注目してよいのは，Jonson にしろ，Herrick にしろ，その主題，その効果はかなり猥雑なものがあるが，Eliot はそれを消却しようと努めていると思われるふしがあることである。もっともこの詩の場合にも，17 歳という年齢が Eliot にとってどういう意味があったのかわれわれには分からない。同じ年に Smith Academy

卒業にあたって作った'At Graduation 1905'という6行 14 連からなる長詩があるが，そこから浮かび上ってくる Eliot 像は，多感な優等生なのであれば，やはり，この詩の場合も Eliot の哲学癖が，Ben Jonson を読んでいて logic の面白さにひかれたとみるべきかもしれない。冒頭の

If Time and Space, as Sages say,
Are things which cannot be,
The sun which does not feel decay
No greater is than we.

にしても，日常的な感覚に基礎をおいた Jonson の Time will not be ours for ever, という行にくらべて，メタフィジカルで，後年の *Four Quartets* の冒頭を予感させる。Eliot はしばしば imitation を主要な作詩方法としてきたし，「マシンジャー論」において大いに弁護するわけだが，この場合も，完全に換骨脱胎している。Harvard に入ってからも，1907 年に'Song'(*The Harvard Advocate*, LXXXIII, 7 June 3, 1907) という詩を作っているが，これは'A Lyric'を二，三言葉をかえただけである。

次の'At Graduation 1905'についてはちょっとふれたが，Eliot はこれを卒業の日に朗読している。卒業していくことを船出にたとえるという至極常套的な比喩を用いて，かなり悲壮な感情をこめて歌っている。一つには，生徒数の減少ということで数年後に廃校になることが分かっていたせいもある。J. Hayward に送った手紙のなかで (1943, 8 月 19 日付)，廃校に対する悲しみや，20 世紀がこれからひらけていく希望に感動してほしい，と書いている。こういう生真面目な態度は，のちにもしばしば現われるし，時に作品を損う要素になっていると私は考える。それでも，Sometime in distant years when we are grown / Gray-haired and old, whatever be our lot, / We shall desire to see again the spot……といったところに *Prufrock* の世界にひろがっていく別の目を感じとることができる。

これ以後の作品は，すべて Harvard に入ってからのもので 1907 年5月 24 日の *The Harvard Advocate*, LXXXIII, 6 に掲載の'Song'は，前出の'Song'とほとんど同じ，というより裏返された主題を扱っている。自然の中の花や葉は枯れていないのに，お前の花環の花は色あせてしまった (But the wild roses in your wreath / Were faded, and leaves were brown.) と歌っている。この詩の中で your という相手を指示する言葉はこの一語だけで，たいへん生々しい。現実に一人の女性がいたのではないかと思わせるほど生々しい。生々しいといえば，1909 年，21 歳のときに作った'On a Portrait'(*The Harvard Advocate*, LXXXVI, 9, Jan. 26, 1909) という詩もきわめて生々しい効果をもっている。

Among a crowd of tenuous dreams, unknown
To us of restless brain and weary feet,
Forever hurrying, up and down the street,
She stands at evening in the room alone.

この最初の3行と後の1行のつくりだす効果はたとえば Yeats の

……Maud Gonne at Howth station waiting a train,
Pallas Athene in that straight back and arrogant head:

に匹敵するほどの生々しさをもっている。Harvard の学友 Conrad Aiken の証言する Miss X とおそらくは関係があるのだろう。

Prufrock のなかの 'A Portrait of a Lady' は劇的手法を用いることで「非個性化」が充分行なわれているが，ここでは作者の個人的心情とつきすぎている。'A Lyric' のところでも書いたように，sexuality の消却をする Eliot，卒業式に模範的な詩を読む優等生の Eliot，それからのちに *Prufrock* の世界で自分にふさわしい masque を発見する Eliot，そうしたさまざまな姿勢でバランスをとっている Eliot の精神構造は，これから解かれなければならない一つの問題であろうと思われる。

この詩が作られた前年，1908 年に Eliot は A. Symons の *The Symbolit Movement in Literature* を読んでいるわけだが，その影響は 1908 年にはまだ現われない。'Before Morning' (*The Harvard Advocate*, LXXXVI, 4—Nov. 13, 1908) はまだ 'A Lyric' の延長線上にある。

> While all the East was weaving red with grey,
> The flowers at the window Turned dawn,
> Petal on Petal, waiting for the day,
> Fresh flowers, withered flowers, flowers of dawn.

注目すべきことは，このあたりから言葉を意味を入れる媒体としてではなく素材として扱うことを始めていることである。Petal on petal とか Fresh flowers, withered flowers, flowers of dawn といういい方は，明らかに「音」に注目している。

翌年も前半は，先の 'On a Portrait'，それに 'Song' (*The Harvard Advocate*, LXXXVI, 9—Jan. 26, 1909) はいぜんとして恋人と花の世界にいるが，暮近くに 'Nocturne' (*The Harvard Advocate*, LXXXVIII, 3—Nov. 12, 1909) が，翌 1910 年には 'Humouresque' (*The Harvard Advocate*, LXXXVIII, 7—Jan. 12, 1910), 'Spleen' (*The Harvard Advocate*, LXXXVIII, 8—Jan. 26, 1910) と次々に発表される。いずれもラフォルグの影響下にある詩である。むろん Symons を通して Laforgue を知るのであるが，Symons を読んだ興奮が静まり，自分の作品に肉化されるのに 1 年を要したことになる。ラフォルグとの関係は Warren Ramsey (*Jules Laforgue and the Ironic Inheritance*, 1953) や Edward J. H. Greene (*T. S. Eliot et La France*, 1951) がほぼ言いつくしているが，あらためて読みなおしてみるとその影響はじつに大きかったことを知ることができる。ピエロとか，月のイメージや言葉が似ているかどうかということではなく，自分や世界の表現方法，世界を眺める視点といったものまでをラフォルグから教えられていることに気づく。今まで，I や You といういわばむきだしのペルソナで表現していたのが，Romeo とか my marionettes という他者を歌うことで自己表現をしている。世界を地獄・煉獄・天国という図式で捉えることを教えたのはダンテであったが，その地獄の内実について明確なヴィジョンを与えた一人はやはりラフォルグであったようである。つまり，Birth, and copulation, and death. という退屈な地獄なのである。そしてこれをボードレールのように悪という原理で捉えたときに，あのダンテの図式に従って運動が始まるが，ラフォルグの捉え方からすれば Spleen なのである。

ここまでくれば，*Prufrock* の世界はもう目の前にある。しかし一方で，Harvard 卒業をひかえて For the hour that is left us Fair Harvard, with thee, ではじまる 'Ode' (*The Harvard Advocate*, LXXXIX, 8—June, 24, 1910) を作ったりする生真面目な優等生 Eliot が消えてしまったわけでは

ない。この詩集の最後の詩は 'The Death of Saint Narcissus' という戦慄的に美しい詩である。これは *Poetry* に掲載予定で，ゲラ刷りまでできたが，けっきょく発表されなかった。1915 年に 'The Love Song of J. Alfred Prufrock' が E. Pound の推薦で *Poetry* にのることになるが，すでに 1910 年頃には Pound, Harriet Monroe らと接触のあったことを物語っている。発表されなかった理由の一つには，

> Come in under the shadow of this gray rock,
> And I will show you something different……

につづく数行が，*The Waste Land* の中でほとんどそのまま使われているところから推して，おそらくは 1910 年頃から *The Waste Land* の構想があったからではなかったろうか。もしそうだとすれば，*Prufrock* から *The Waste Land* へとじょじょに Eliot の世界観が変わっていったとする説は変更をせまられるかもしれない。(J. Hayward は，この詩が *The Waste Land* と似ているからといって，ずっと後になって作られたと考えてはならない，といっている。)

*　*

たいへん大いそぎでこの詩集を駈けぬけてきたが，この詩集は Eliot の作品群の外典として読まれるべきであるが，それでもなお，われわれ自身の手で解くべき重要かつ興味深い問題をはらんでいる。

T. S. Eliot: *Poems Written in Early Youth*, Faber & Faber, 1967

Marcel Muller: *Les Voix Narratives dans la Recherche du Temps Perdu*

鈴 木 道 彦

巻末の短い結論において，著者は本書の意図を次のように要約している。

> 〈考察の過程で，私の頭にこびりついていた或る芸術作品の思い出がある。Vermeer の《絵画のアレゴリー》がそれだ。この《絵画の絵画》が描く中心人物は，自己の画布に向きあっている一人の画家であるが，この絵は《失われた時を求めて》(A la Recherche du Temps Perdu) のアレゴリーと見なすことも許されよう。絵の中心にいるのはだれか？《私》とはだれか？《われわれ》とはだれか？《ひと》(on) という言葉をどう定義したらよいか？ 私はこれらの問題に解答を与えようと試みたのだ。〉(p. 177)

〈絵画の絵画〉という表現からは，ただちに近ごろ流行の〈小説の小説〉という言葉が浮かび上がるであろう。Proust の《失われた時を求めて》は，この〈小説の小説〉の源流であり，少なくともその出発点の一つなのであるから，本書の著者 Marcel Muller の試みは，今やあまりに乱発されているかに見える〈小説の小説〉論議を原点にさかのぼって考えるためにも見逃すことのできぬものである。

さて，〈小説の小説〉探求に当たって，検討さるべき問題の一つに，〈書いているのはだれか〉あるいは〈語っているのはだれか〉という問いに要約されるものがある。今さら